

大和川下流部の植物相調査



自然・環境再生研究部 生物資源研究グループ

藤井 俊夫

調査の目的

大阪市南部と堺市北部を東から西へと流れる大和川の下流部に広がる住宅地や田畑周辺の植物相を調査した。15年前の2008年に学生時代を過ごしたJR杉本町周辺の半径1 km四方の地域で出現した植物を報告したので、その後の植物相の変遷を明らかにする調査である。

15年前の植物相

当時の植物は244種確認され、在来種139種、外来種105種であった。帰化率43%と、大阪市内の公園や緑地と同様に、周辺の田園地帯や里山に比べて高くなった。



カモノハシガヤ



カワヂシャ

今回の調査で確認された植物

昨年（2023年）4月から調査をはじめ、12月の時点で367種の植物が確認された。在来種が168種、外来種が199種出現し、帰化率は54%に増加していた。外来種が94種増加していた。

調査地周辺の環境の変化

大和川の下流部は田畑や住宅地が広がる地域であるが、開発により田畑が宅地に代わり、川沿いの堤防も工事が行われたり、大雨や台風の影響で河道が変わったり、上流から様々な植物が種子、茎や根の断片として流れてくるため、植物種の入替わりが激しい地域である。

調査地で見られた貴重種

カワヂシャ（大阪府：C）、コイヌガラシ（大阪府：C）、ハマハナヤスリ（大阪府：A）が確認された。

特筆すべき外来種

カモノハシガヤ

関東、九州、沖縄での記録があるが、近畿では初記録と思われる。